

# 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領と「キャリア教育」 異年齢交流を通じた取組について

こども園保育教諭 松下 啓子

## 1. はじめに

本園は2015年に幼保連携型認定こども園に移行し、今年度で3年目となる。0～2歳の保育課程、3～5歳の教育課程に編成されていて、それぞれのカリキュラムや実践はできており、連携している面もあるが、今後は子どもの育ちを系統的な視点で教育保育していく必要があると考える。

認定こども園となったことで、幼稚園だけの時代にはなかった様々な課題が見えてきた。その一つとして保育課程修了の2歳児から教育課程進級の3歳児への移行期がある。

乳児期から入園し、保育教諭と愛着形成が図られ、信頼関係の下で自己肯定感をもって過ごしてきた2歳児は、3歳児に進級すると大きな不安を感じながら初めて登園する新入園児の子どもたちと出会い、人数が増えた集団の中で共に過ごす。その中で新入園児の姿に気づき、自分も再び不安な気持ちになり、できていたことができなかったり、保育教諭から離れられなくなったりする。また2歳児は個別対応であるのに対し、3歳児になると集団の中での個への対応となる。そのことも不安の要因の一つとなっていると考える。

これらの移行期の課題は、認定こども園全般の課題とされているが、本園ではその不安を軽減できることはないかと考え、以下のような具体的な実践を行ってきた。

3歳児と5歳児の交流があることから、2歳児が3歳児に進級した時に5歳児に進級している4歳児からのサポートが受けられるように、前段階として2歳児と4歳児の交流を提案し、計画を立てて取り組んだ。その取組の経過、成果、反省を順次示していく。

## 2. 本園の概要

### 2. 1. 幼保連携型認定こども園への移行について

社会の変容、特に女性の社会進出に伴い、1969年の幼稚園設立から44年後となる2013年に、学院として子育て支援に社会貢献するため、認定こども園となる「おうてもんがくいんこども園」を設立し、0・1・2歳児の保育を開始した。その2年後、「子ども・子育て支援制度」が始まり、幼保連携型認定こども園へ移行し、市役所より保育の必要があると認定された子どもである2号認定

の子どもを受け入れることになった。

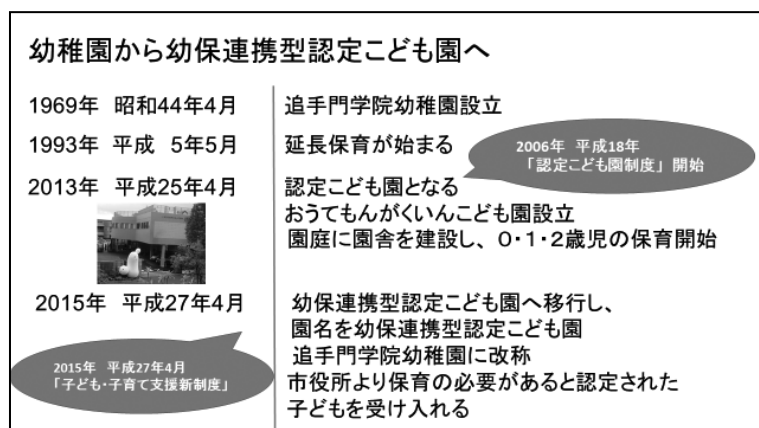


図1 幼保連携型認定こども園への移行について

## 2. 2. 本園の教育保育理念・教育目標

本園の教育保育理念は、学院の教育理念である「独立自彊・社会有意」に基づき、「自分のしっかりとした考えを持ち、将来社会に貢献できる人材、社会で活躍できる人材を育てる」となっている。そのために就学前の教育・保育で必要となることは、何事にも前向き、積極的に取り組むことができるような姿勢が身につくようにすることである。その源となるのは一人ひとりの心の中に育った自信、確かな自尊感情・自己肯定感であり、その感情を就学前に育てることを第一の要点としている。

教育目標は「ひろびろ のびのび いきいき」と表現され、それぞれの言葉の意味を「ひろびろー素晴らしい環境（教職員・保護者・友達・施設設備・周辺環境）を整える」、「のびのびー一人ひとりを大切に、個の成長に応じた指導、認められているという安心感、見守られているという安心感を与える」、「いきいきー一人ひとりがしっかりとした自尊感情を持ち、自信を持って活動する」としている。

このように教育理念と教育目標のいずれにおいても、自己肯定感や自己有能感が育つことを本園では大切にしている。

## 3. 「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」改訂

保育課程と教育課程が連携するにあたり、0～5歳児までの連続した育ちが大切となる。本園にとっても大きな指針となるため、「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」の要旨について紹介する。

少子化や情報化などの急激な社会の変容のために、子どもの生活環境や育ちの実態も大きく変

化してきた。そのような中で、2017年に「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」（以下、教育・保育要領）が改訂・告示された。主な改訂のポイントとして、①育みたい資質・能力の3つの柱、②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10の姿、③カリキュラム・マネジメント、④主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）、⑤「非認知能力」の育成、⑥「評価」のあり方の改善、⑦特別な配慮を必要とする幼児への指導－などがある。

全体的に小学校との接続、発達の連続性や学びの連続性が、強く意識されている内容だと感じる。

その中でも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10の姿（図2）は、園児の幼児教育修了時の具体的な姿であり、保育教諭が指導する際に考慮するものとなっている。この10の姿は幼児期に完全にできるようになるということではなく、子どもたちが歩みだしている方向を表しており、小学校教育の始めにおいても指導を継続していくことが、小学校の学習指導要領にも明記されている。

内容を見ると、キャリア教育で育てる基盤となる能力、人間関係能力や課題達成能力などと重なる部分も多く、幼児期の保育・教育はキャリア発達を促すキャリア教育そのものだと考える。

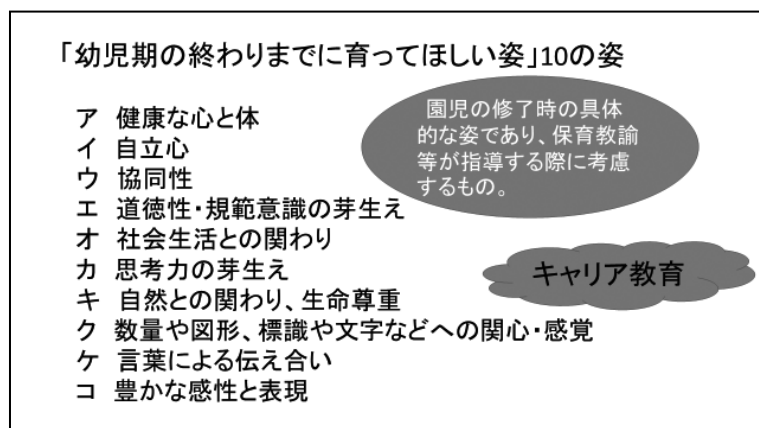


図2 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10の姿

また今回の改訂で、特に重視された事柄として「非認知能力」がある。

「非認知能力」は知的な能力以外のもので、目標に向かってあきらめずにやり遂げる力や人と関わる力、自分の気持ちを調整する力などがあり、幼児期に顕著に発達し、その後の生活に差を生じさせると言われている。それは主体的に遊ぶ中で育つとされている。では主体的に遊ぶとはどのようなことか考えてみる。それは、子どもが興味・関心を広げた中から、自分で考え、遊びを選択し、自ら遊びを展開していくことである。その過程の中で、試行錯誤して問題を乗り越えていくことで満足感、充実感を味わい、自信を持って、次の意欲へとつなげていくことができる。そしてその主体性の基礎となるのが、自己肯定感、自己有能感なのである。

現在の教育・保育も見直しつつ、これらの力が育つように認定こども園の特色を生かして、実践的に研究を始めた。

## 4. 研究・取組の内容

### 4. 1. 研究目的

園の規模や定員にもよるが、認定こども園の運営の難しさ、課題の一つとしてあるのが2歳児から3歳児への進級である。まずは、2歳児と3歳児のそれぞれの違いについてみていく。

2歳児は、保育教諭の配置が概ね子ども6人に1人であり、「個」の育ちを中心にみている生活で、教育・保育要領には「愛情豊かに応答的に保育を行われること」とされている。

それが3歳児になると保育教諭の配置が20人に1人となり、「集団」の計画の中で「個」への配慮をする生活となり、教育・保育要領には「個の成長と集団としての活動充実が図れるように」とある。表1を見てわかるように、本園では2歳児が18名、3歳児が120名と在園児数にとっても大きな差がある。3歳児1クラスが30名で、各クラスに4、5名の進級児となる。

また2歳児から進級してきた子どもは、初めて入園する不安を抱えた子どもたちと出会い、安定していた生活から大きな不安を感じながら過ごす。その中で、できていたことができなくなったり、保育教諭から離れられなくなったりすることがある。私自身、3歳児の担任を持つことがここ数年あったが、2歳児から進級してきた子どもは、他の入園児に比べて教育課程の雰囲気や園舎に慣れているはずなのに、不安定になり泣き続けることがあった。

以上のようなことを踏まえ、今回は追手門学院の一貫した教育の第一歩として、保育課程と教育課程の連携について、2歳児から3歳児のつなぎ目に注目し、不安を軽減しスムーズな移行を促すことを目的として、具体的に取組を考案し研究することにした。

表1 各学年の在園児数

|      | 保育課程 |     |     | 教育課程 |      |      |
|------|------|-----|-----|------|------|------|
| 学 年  | 0歳児  | 1歳児 | 2歳児 | 3歳児  | 4歳児  | 5歳児  |
| 在園児数 | 9名   | 15名 | 18名 | 120名 | 127名 | 126名 |

### 4. 2. 2歳児と4歳児の交流

進級児の不安を軽減できることはないかと考え、本園では3歳児と5歳児が交流する機会が多くあることから、その前段階として2歳児と4歳児の交流をすることにした。

保護者が就労している2歳児の子どもは、3歳児に進級するとクラスの保育終了後の午後2時から3～5歳児と一緒に遊ぶ預かり保育で過ごすことになる。保育室を移動し、担当の保育教諭も変わる。その預かり保育の際に、一緒に遊んだお兄ちゃん、お姉ちゃんが5歳児でいることで安心感を持ち、進級へのスムーズな移行を手助けするのではないかと考えた。

グループ活動を行う際は2歳児の子ども1人に対して、6～7人の4歳児のグループとなる。そのため4歳児の2号認定の子どもがグループの中に入っているようにメンバー構成を考慮することにした。

また交流を通して教育課程の保育室や子どもたちの雰囲気慣れ、安心につながるように配慮した。

#### 4. 3. 異年齢交流のねらいについて

異年齢交流からどんなことが育つか、ねらいについてみていく。

- 1) 生活経験を豊かにする。家庭や地域において異年齢の子どもとのかかわる機会が減少しているため、年下や年上の子どもと関わる機会を作る。教育・保育要領の第1章総則にも「満3歳以上の園児については、学級に集団活動とともに、満3歳未満の園児を含む異年齢の園児による活動を、園児の発達の状況にも配慮しつつ適切に組み合わせて設定するなどの工夫をすること」とある。
- 2) 大切にされたり、役に立ったりすることで、自己有能感を高める。
- 3) 関わりの中で、思い通りにいかないという葛藤やつまづきを体験することで、相手にも気持ちがあることに気づく。それを乗り越えていくことで思いやりの気持ちが芽生えていく。感情をコントロールする力、問題を解決していく力を育てる。
- 4) 保育課程と教育課程の保育教諭同士の交流も図り、関わる中で教育・保育についてそれぞれの知見を深めていく。

以上のようなねらいをもとに実践を進める中で、本園が大切にしている主体性の基礎となる自己有能感も高めることができた。

#### 4. 4. 交流のネーミングについて

親しみが持てるようにと交流のネーミングも考えた。交流することで、影響を与え合い、のびのびと共に学びながら育ち合って、2歳と4歳が掛け合わさることで無限の可能性や力を引き出していきたいとの願いを込めて「のびのび∞プロジェクト」と名付けた。

#### 5. 交流の内容

長く続けていけるように、今ある行事のなかで交流を図ることにした。

交流プログラムと内容は表2の通りである。

グループのメンバー構成は、一人っ子や兄弟がいる子、4歳児のグループ分けには、2号認定の子どもが入っているように考慮した。

自分の気持ちを友達の前で伝えることで、受け止めて聞いてもらえる安心感が得られたり、友達との違いに気づいたり、気持ちの伝え方を学べたりするため、交流後の振り返りを必ず行うことにした。

振り返りをした後の子どもたちの声や様子、担任が読み取った育ちを各クラス報告してもらい、全体の様子を把握した。子どもたちの声を聴くことで、子どもの気持ちや育ち、改善点を見出せた。

めに大きく役立っている。

表2 交流プログラム・内容

| 実施日  | 内 容                                                                                 | 活動単位           |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------|----------------|
| ①9月  | わんぱくタイムⅠで一緒に遊ぶ。                                                                     | 全体             |
| ②10月 | 自己紹介をしてグループの顔合わせをする。<br>食育クッキング「茶巾絞り」をする。<br>お店屋さんごっこ「財布づくり」をする。<br>教育課程の給食を一緒に食べる。 | 各クラス<br>グループ活動 |
| ③10月 | お店屋さんごっこ 一緒にお店を回り、買い物をする。                                                           | 2クラス<br>グループ活動 |
| ④11月 | 4歳児の生活発表会の練習を見る。                                                                    | 2クラスずつ<br>2回実施 |
| ④12月 | わんぱくタイムⅡで一緒に遊ぶ。                                                                     | 各クラス           |
| ⑥1月  | マラソンの移動の際に、2歳児と4歳児と一緒に手をつないで移動する。<br>4回に分けて実施する。                                    | 1クラスずつ<br>4回実施 |
| ⑦2月  | わんぱくタイムⅢで一緒に遊ぶ。                                                                     | 各クラス           |
| ⑧3月  | のびのび∞プロジェクト 修了の会                                                                    | 全体             |

## 5. 1. わんぱくタイムⅠ

4歳児で実施しているわんぱくタイムに、2歳児が参加した。4つの保育室で、それぞれの遊びが設定され、クラスを越えて自分の好きな遊びを見つけて主体的に遊ぶというねらいがある。一緒に遊ぶ中で、クラスの様子や雰囲気を2歳児にみってもらうことにした。

表3 わんぱくタイムⅠの遊びの内容

| クラス   | 内 容                  |
|-------|----------------------|
| きく組   | 「制作」ぬりえ・折り紙・花紙・シール貼り |
| ばら組   | 「おもまごと」              |
| すみれ組  | 「ブロック」               |
| ひまわり組 | 「カプラ」                |

## 5. 1-2. 子どもの様子と振り返り

この交流では、時間が経つにつれて、子ども同士が打ち解け合い、関わり合いながら遊びが発展していた。

3人兄弟の末っ子で活発な遊びを好む4歳児Aくんは、2歳児の子が可愛かったようで「この子可愛い、面白い」といろんな人形を並べ、一生懸命関わろうとしている姿が見られた。喜んでもらったことで、嬉しそうにしていた。年下の子どもと関わる機会がないためか興味を持って、相手の思いを考えながら関わり、工夫して遊んでいた。

Bちゃんは、普段落ち着いて椅子に座って取り組むことが難しく、2歳児の中では友達との関わりもあまり見られない。制作が好きで、4歳児Cちゃんに優しく教えてもらいながら、30分も集中

して作品を作り上げ、誇らしい表情だった。「上手にできたね」と年上の子に優しくしてもらえたことに自信を持ち、普段は担任も見られない力を発揮していた。その姿を通して、短い時間であったが子ども同士の関わりの中で、自己有能感が高まったことで育つ力があること、また同年代ではなく、異年齢だからこそ育つ力があるということを感じた。

振り返りでは、「楽しかった」「またしたい」という声が多かった。三川所長には、関わり合う中で「楽しい」から「嬉しい」に子どもたちの声が変わっていくと良いと助言をいただき、「嬉しい」の声が増えるように目指すことにした。

一方で交流する様子があまり見られないということがあった。これは人数の比率の差や4歳児にとっては開始したばかりの実施回数の少ないわんぱくタイムであったため、自分の遊びに夢中になってしまったことが原因だと考えられる。しかし、自分の好きな遊びを見つけ主体的に遊び、2歳児が教育課程のクラスの様子や雰囲気を見てもらうことをねらいとしていたため、その中でも関わりが見られたので良かったと感じる。

保育教諭が言葉掛けをすることで関わりを持って遊んだり、意識したりしている子もいたため、人数の比率の問題もあるが、子どもと子どもをつなぐ関わりをしていくことが大切だと思った。

## 5. 2. 食育クッキング「茶巾しぼり」「財布作り」

グループでの活動が始まった。自己紹介をして「自分のグループの友達の名前を知り、活動を通して親しみを持つ」「季節の野菜であるさつまいもについて知り、自分で茶巾絞りを作って、食べる楽しさを味わう」「財布づくりを通して、お店屋さんごっこに期待を持つ」また交流を通して「年下の友達を手伝ったり、教えたりすることで役に立つことを喜んだり、声を掛けてもらったり、援助してもらったりすることを通して、年上の友達と過ごす楽しさを感じたりする」などがねらいとしてあった。その後、給食も一緒に食べた。

### 5. 2-1. 子どもの様子と振り返り

席が指定されていたこともあり、前回より深まった交流が見られた。4歳児は2歳児の口を拭いてあげる姿もあり、世話をしたいという気持ちが強くあった。「可愛かった。名前を覚えた」「一緒にできて嬉しかった」「また一緒に遊びたいな」などの声があった。

しかし、2歳児の集中力は10～15分で、今回設定された一斉保育の時間が長く、いつもと違う雰囲気に緊張して固まって泣いてしまう2歳児がでてきた。

そんな姿に、会えるのを楽しみにしていた4歳児は優しく声をかけているのに「どうして泣いているのだろう」「どうしてあげたら一緒に楽しくできるのだろう」と戸惑う場面があった。それでも粘り強く関わる姿も見られた。環境の変化に緊張して動かない2歳児に「この子全然してくれない」と困り果てていたが一生懸命関わり、最後には一緒に財布を折り、絵を描いてあげていた。4歳児にとっては、相手にも様々な気持ちがあるということを強く感じる良いきっかけとなった。

不安からか担任の近くで過ごす2歳児もいた。交流がまだ深まっていない段階で仕方のない状況であったが、子ども同士の関わりを大切にするため、少しずつ慣れてきたら保育教諭はできるだけ見守るようにし、最低限の援助をするようにしようと保育教諭同士で話し合った。

一斉保育の方が子ども同士が関わる機会が増えるため交流を深めるには有効であるが、2歳児の集中力を配慮して取り入れることが重要であると感じた。

その他、2歳児担任が4歳児の生活を見るなかで、うがいの指導や上靴に慣れること、給食の用意の仕方など、進級するために必要な改善点を見つけることができた。小さなことであるが教育保育の連携にとってはとても大切なことだと考える。

### 5. 3. お店屋さんごっこ

お店屋さんごっこでは、お店屋さんやお客さんになりきって、お金のやり取りをしながら自分たちで作った商品を売ったり、買ったりする。本園では3歳児が買い物をする際に、5歳児がペアになって手伝いをしている。4歳児は学年内でお店屋さんごっこをし、2歳児は例年1人で買い物をしていたが、交流に取り入れて一緒に買い物をすることにした。4歳児はグループ内で売の人と買う人に分かれて、2歳児の子と一緒に買い物をした。その後4歳児のみのお店屋さんごっこをしたが、その際に2歳児は商品の前に立ってお店屋さんになった。

#### 5. 3-1. 子どもの様子と振り返り

前回の交流で2歳児の顔を覚えていて、4歳児が「助けてあげよう」「手伝ってあげよう」という気持ちが以前よりも見られた。振り返りでも「可愛かった」「楽しかった」「一緒にお買い物ができて嬉しかった」「もう一回会いにきてくれて嬉しかった」という声があり、2歳児の子に「いらっしゃいませだよ」と声掛けの仕方を教えてあげる姿もあった。その反面「泣いてしまって大変だった」という声もあり、「こうしてあげたいけどうまくいかない」という思い通りにいかないという葛藤を体験することができた。4歳児も楽しみにしていた行事であったため、2歳児のことを考えられない子もいた。

2歳児では、お金に興味を持ってお客さんに商品を勧めている子もいたが、何をしているかわからないまま終わっている子もいた。お店屋さんごっこの導入をもう少ししていれば、意識して取り組んでいたのではないかと指摘もあったため、次年度に活かしていきたい。

前回の交流も含めて、関わりたい気持ちが育ってきている4歳児に一斉に迫られて、2歳児が怖がる姿があった。そのためどうして泣いていたのか、どうしてあげたら良いか、クラスで話し合う機会を作った。

保育教諭との対話を通して、先生「泣いていたらどうしたらよいかな」、4歳児「手伝ってあげる」、先生「どうやって手伝ってあげたらよいかな」、4歳児「優しく」、先生「優しくってどういうことなの」と2歳児の子どもたちにも自分でやりたい気持ちがあるから、無理やり手伝うのはよ

くなくというところまで話が深まった。思い通りにいかないということを体験し、保育教諭や友達との対話を通して子どもたちの考えが広がり、相手の気持ちを大切にすることによって気づくことができた。これらの経験は「幼児期までに育ててほしい姿」の「思考力の芽生え」や「言葉による伝え合い」に当てはまり、4歳児にとってとても深い学びとなった。語り合いの中で、共感したり、友達との違いに気づいたりしながら新たな考えを生み出していく振り返りの重要性を再認識することができた。子どもたちの話し合いは私の予想していた以上に深まり、そこから生まれた考えが、大きく広がっていったことに、感動した。それと同時にこちらが学ぶべきことが多くあると感じることができた。

そしてより親しみを持って交流を深めていけるように、2歳児の顔写真と名前を4歳児の保育室に掲示することにした。そうしたことで子どもたちも同じグループの子を覚え、嬉しそうに見ている姿が見られた。

#### 5. 4. 生活発表会の練習を見る

4歳児の生活発表会の練習を保育室に見に来てもらった。2歳児の子どもたちに見てもらおうことで頑張る気持ちを育てることをねらいとした。4歳児の2クラスに分かれて2回、2歳児に見に来てもらった。

#### 5. 4-1. 子どもの様子と振り返り

これまでの交流のことを踏まえ、活動する前に2歳児の子どもの気持ちを大切にしてお互いの関わり合いに話をした。お店屋さんごっこでは、泣いていたり、張り切った4歳児に引っ張られたりしている子がいたが、今回は4歳児の演技に夢中になり、30分も集中して見ており、真似をして一緒に踊っている姿もあった。2歳児では「かっこよかった」「ドキドキした」「楽しかった」などの声があった。4歳児では「恥ずかしかったけど、見てもらっているから頑張れた」「こぐま組さんが可愛すぎて、踊るのを忘れた」「踊るのがもっと楽しくなった」「来てくれて嬉しかった」「拍手をもらったのが嬉しかった」と2歳児が見に来たことで発表会に向けて頑張る意識を強めることができた。グループの子の名前を呼んで、会えて嬉しそうにしている子もあり、交流の深まりを感じた。

一方で保育教諭の話し合いで、2歳児の生活発表会の日が離れていて、劇に対する意識があまりない状態で練習を見ても育つことはあるのかという声が出てきた。保育課程と教育課程の行事の時期や進め方の違いがあるため、つながりのある導入が必要であると感じた。これも交流する中で気づけたことであった。4歳児にとってはとても良いことであるが、今後は2歳児の育ちも大切に内容の検討を行う。

#### 5. 5. わんぱくタイムⅡ

前回のわんぱくタイムⅠを進展させ、主体的・対話的で深い学びである「アクティブラーニン

グ」の要素を取り入れた。2歳児の子どもが4歳児の各保育室に遊びに来ることを知らせ、「どんな遊びがあれば一緒に遊んで喜んでもらえるか」と対話しながら遊びを提案し、内容を決めて実施した。遊びの内容は表4の通りである。

表4 わんぱくタイムⅡの遊びの内容

| クラス   | 遊 び の 内 容                                                                               |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| きく組   | ①カプラ・ブロック ②お店屋さん（作ったものを使ってお金で売ったり買ったりできる）③ひこうき大会（飛行機を作って飛ばす）④制作（プレスレット・折り紙を使って好きなものを作る） |
| ばら組   | 全員で椅子取りゲーム<br>①カプラ ②おままごと ③ダンス（着せ替え・音楽）④忍者ごっこ（しゅりけんづくり・忍者の家・忍者のお面）                      |
| すみれ組  | ①スライム ②クリスマス制作（クリスマスツリーを作る）③おままごと                                                       |
| ひまわり組 | 全員で宝探し（前日に折った折り紙を保育室に隠し、探す）<br>①絵描き歌・ぬりえ・折り紙 ②絵本（2歳児さんに読んであげる）③ブロック                     |

### 5. 5-1. 各クラスの子どもの様子と振り返り

きく組—お店屋さんごっこのつながりからお店さんのコーナーや、飛行機博士がいたため飛行機づくりのコーナーができた。飛行機を一生懸命折ってあげる姿や制作で優しく教えてあげりる姿が見られた。「自分たちが考えた遊びを気に入ってくれて良かった」「一緒に遊んで笑顔が見れて嬉しくなった」という声があった。

ばら組—椅子取りゲームをみんなでしたいとの意見があり、前日にルール決めをして全員で最初にゲームをした。自己主張する子どもが多いクラスだが、自分たちで決めたルールを守って2歳児の子に譲りながら遊んでいた。前日のルール決めでは、友達に譲れなかった子が2歳児の子に優しく譲ってあげている姿も見られた。振り返りでは「忍者の家にあまり入ってくれなかった」との声に、「ちょっと暗すぎたかもしれない」「おばけがいるのかと思ってしまったかも」「次は明るい家を作ってあげよう」と話をしていた。

すみれ組—スライム作りをしたいという強い思いがあり、前日の準備でスライム作りをした。その時の子どもたちのわくわくドキドキした表情がとても印象的で、きらきらした目で見ていた。振り返りで「スライムは2歳児の子が気持ち悪いと言ってあまり遊んでくれなかった」との声があり、「洗濯のりと洗剤で作ったから汚くないよと遊ぶ前に説明してあげれば良かった」「スライムを食べないようにと言い過ぎたかな」「次は、違う色を作って、もっと遊んでくれるようにしたい」と話し合っていた。「おままごとで楽しそうに遊んでいたから次もおままごとをやってあげたい」との声があった。

ひまわり組—2歳児の子どもたちと宝探しをしたいと言って、前日に宝物である折り紙を折る準備をしていた。その他、絵本を読んであげたいという子がいて、最初は恥ずかしくてできていなかったが保育教諭の促しもあって一生懸命読んでいる姿が微笑ましかった。折り紙の宝物を2歳児

と4歳児が一緒に見つけ出し、2歳の子がとても嬉しそうな表情で担任に見せていた。

今回の交流での子どもの関わりを紹介する。

始めのわんぱくタイムⅠで紹介したBちゃんは、茶巾絞りやお店屋さんごっこの時は泣いていたが、今回は優しく穏やかなDちゃんといることが心地良かったのか、一緒に制作をして最後には手をつないで遊んでいた。4歳児は一緒に遊びたいという気持ちが育っていて自然と関わることができていた。BちゃんもDちゃんが大切にしてくれるなかで、安心して興味のある制作に取り組んでいた。それ以降、Bちゃんは交流が深まるに度に笑顔で4歳児と過ごしている。

控え目な4歳児のEちゃんは、保育教諭に小さな声ではずかしそうに「～と遊びたい」と言い、何の遊びがしたいのと尋ねると「こぐま組さんと遊びたい」と答えた。保育教諭の促しもあって一緒に遊ぶことができ、とても嬉しそうにしていた。交流した結果、関わりたいという気持ちが育っていることを感じた瞬間だった。

ブロックでコマづくりをするのが得意な4歳児のFくん。2歳児のGくんに積極的に話しかけてコマづくりを伝授したところ、Gくんがまねをして作り嬉しそうに遊ぶ姿に、誇らしそうにしており、役に立つ喜びを感じていた。

茶巾絞りの際も、環境の変化に固まっていた2歳児のHちゃんが今回は泣いていた。保育教諭が話しかけようとした時に、4歳児のIくんが現れた。Iくんは、一人っ子で普段は友達との関わりも少なく、保育教諭も常に気にかけている子である。彼が言葉掛けをすることで、Hちゃんは泣き止んでソフトブロックに気持ちが向かい遊び始めた。彼は喜んでほしいと思い、おもちゃの食べ物をお皿に入れてHちゃんの前に運び出した。するとHちゃんは少しずつ心を開き、最後は一緒に遊んでいた。彼の嬉しそうな笑顔が、とても微笑ましかった。「楽しく遊んでほしい」と工夫しながら、粘り強くあきらめずに関わり、「笑顔で遊んでくれた」とやり遂げることで達成感を味わっている様子であった。Iくんの新たな一面を見ることができた。またHちゃんは優しくしてもらえたことで心を開いて遊びに向かうことができていた。この出来事を通して子どもには大きな力があると再認識することができた。また、Iくんにとって大きな自信になったと考える。

その他、「名前が呼べて、名前を覚えていてくれて嬉しかった」「考えた遊びを気に入ってくれて嬉しかった」などの声があり、2歳の子に「教えることができた」という喜びや達成感を味わう表情が見ることができた。

4歳児は今回のわんぱくタイムⅡで自分の思いや考えを出し合ってみんなで決めた遊びを実現させ、2歳児と一緒に主体的に遊ぶ中で試行錯誤し、心を動かされる体験をした。それが考える力になり、「これはよくなかったので次はこうしたい」と次の活動を生み出そうとしていた。この体験の積み重ねが深い学び（アクティブラーニング）へとつながることが考えられるため、引き続き行っていきたい。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」という内容の育ちを促すことができた。

## 6. 今後の課題と取り組み

交流を重ねるごとに自然と関わり、優しく教えてあげる姿や優しくしてもらえたことへの満足感などを感じることができていた。そして三川所長より助言があった通り、「楽しい」から「嬉しい」という声が多く聴けるようになってきた。

「妹ができたみたいに可愛い」「お兄ちゃんやお姉ちゃんが優しくしてくれて嬉しかった」「また会いたい」などの声があり、異年齢の子どもと関わる機会を作ることによって普段できないことを経験することができた。そこで大切にされたり、役に立つ喜びを感じたりしている場面が多くあり、「優しくしてもらえて嬉しい」「喜んでくれて嬉しい」と自信を持って行動する姿が見られた。そのため、異年齢交流は自己有能感を高めるためにとても有効な取り組みであると考え。加えて2歳児と4歳児という2歳の差があることで、「小さくて可愛いから大切にしたい」「お兄ちゃんやお姉ちゃん大きくてかっこいい」という思いを強くすることができたと感じる。

そしてねらい通り、4歳児は2歳児と交流する中で思い通りにいかないことを体験した。そのことで友達の気持ちに気づき、「どんな気持ちかな」「どうしてあげれば良いかな」と気持ちを想像しながら関わる力が少しずつ身についてきた。これから子どもたちが生きていく時代のなかで重要であると考えられているのが「人と関わる力」である。この交流がその力を育むために有効であったと感じる。

交流の中で振り返りを大切にしてきたが、回数を重ねるごとに自信を持って自分の思いを友達の前で発表したり、自分と違う意見に友達との違いに気づいたりする姿が見られた。また語り合いを通じて新たな考えを広げ、友達と考えを共有する場面もあった。自己有能感や主体性を高めることができるため、これからも振り返りを重視していきたい。

子ども同士の関わりや遊びの内容の提案、振り返りなど「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」を育てるためにとても有効的であり、この交流を通して子どもたちの中に育つ力が多くあった。

交流を通して保育課程と教育課程の先生同士が子どもの育ちについて話し合うことができた。保育課程の先生は教育課程の子どもたちの生活や行事の流れを知り、2歳児の教育保育について振り返ることができた。また教育課程の先生は2歳児への言葉掛けの仕方や子どもへの理解が深めることができた。それぞれの保育教諭同士が話し合いをする機会が今までなかったため、連携への第一歩を踏み出せたのではないかと考える。

交流をする中で、見えてきた課題もあった。交流が深まっていない段階で、一斉保育で一緒にいる時間を長くしてしまったため、泣きだしてしまう2歳児がでてきてしまった。次年度は、より一つ一つの交流につながりのある内容を慎重に検討していき、設定した一斉にする内容ではなく、わんぱくタイムのような遊ぶ中で自然に交流できる内容、子どもの声にも出てきた散歩なども取り入れていきたいと考える。

人数の比率の問題もでてきた。32人の4歳児クラスの中に4、5人の2歳児の比率で交流できていない子が出てきたり、関わりたい4歳児に一齐に迫らせて不安を感じた2歳児がいたりした。2クラスで2回ずつ交流するなど、2歳児の子どもたちにとって安心して過ごすことのできる環境構成が必要であると感じる。

今後は異年齢交流を続けながら、幼児期のキャリア教育について深めていくため、箕面市立かやの幼稚園を訪問し、本園の交流で取り入れられるものは取り入れて、次年度の取組に向けて子どもの育ちにとって一番良い形となるような交流の仕方を考えていく。

また、今回の交流では2歳児への配慮が足りていない部分があったため、2歳児について理解を深め、2歳児側の育ちについても重視していく。新たな取組としてスムーズな進級に向けて、2歳児が3歳児のクラスに入って教育課程の生活を体験することを提案し、2月に実施することになった。

4月には交流を経験した2歳児が教育課程に進級する。この取組が少しでもスムーズな進級の手助けとなれたかどうか検証していき、その結果を次の研究につなげていきたい。2歳児が進級し、より安心して園生活が過ごせるようになることを願う。

取り組みの課題は多くあるが、子どもたちの無限の可能性、育ちを引き出すため、これからも子どもの未来を託された保育教諭として挑戦し続けていきたい。

## 参考文献

- 1) 『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』＜平成29年告示＞2017
- 2) 無藤 隆『平成29年告示 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 まるわかりガイド』2017
- 3) 大阪府人権教育研究協議会『わたし出会い発見Part 7 仲間とつながる 社会をつくる 未来をひらく 子どもとつくるキャリア教育 学習プラン・実践集』2009
- 4) 三川 俊樹『幼児期におけるキャリア教育 キャリア発達を促進する取組』研修資料2016
- 5) 安達 譲『主体的に生きる子を育てる一指針・要領等の改訂を踏まえて』研修資料2017
- 6) 大方 美香『新たな幼児教育像—幼稚園教育要領改訂の方向—』研修資料2017

